



# NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2016.7.1 発行 NO.39

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

日本保育学会第69回大会 自主シンポジウム 報告

## 日本の保育・子育てのグランドデザインを、 保育園から提起する—乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう

### 全体の報告 6つの対話のキーワードをもとに

子ども・子育て支援が新制度に切り替わりましたが、よって立つ法律の違いによって、保育の概念が「保育」「教育」「学校教育」と無理やり切り分けられ、また3歳未満児にはなじまないと、「3歳で切り分けられる教育」とはいったいどういうものなのでしょうか。「保育の質」が求められても、その基となる子ども観・育ち観・それを支える教育観が定まらず、言葉だけが独り歩きしています。本研究機構では、このような理念定義に異を唱え、そもそも「乳幼児期の教育とは何か？」を明らかにしたいと、組織内報告書『乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう—日本の保育・子育てのグランドデザインへの招き』（以下、単に報告書、『保育通信』2015年9月号に同封）としてまとめました。報告書に込めた願いは、「教育の真の創造」に向けた対話を広げていくことです。

そこで本研究機構では、対話を組織の外へも広げたいと、日本保育学会第69回大会（5月7・8日、東京学芸大学で開催）で、表記の自主シンポジウムを企画しました。シンポジウムは、司会：室田一樹（岩屋こども園アカンパニ）、企画者：鈴木眞廣（和光保育園）、話題提供者1：遠山洋一（バオバブちいさな家保育園）、

話題提供者2：片山喜章（〔社福〕種の会）、話題提供者3：井出孝太郎（えじり保育園）、指定討論者：久保健太（関東学院大学）で行いました。

このシンポジウムでの対話のキーワードは、報告書にまとめた6つの理念、「カラダで世界と出会う」（アタマではなく、まずはカラダで世界と出会う）、「何だろう？」（人間がもともと持っている周囲への好奇心・探究心で、その場その場で起きる偶然に応じながら、いろいろ試してみる）、「うつくしい」（カラダを通して世界からキャッチしたものを、表現しようとする）、「共に生きる」（共に生き、共に育て、学び合う）、「やわらかい」（自分と異なる多様なものにつきあう）、「思う・願う」（大人は子どもに対する「願い」を持ちつつ、子どもを操作しようとしません）です。今考えると、キーワードの一つひとつに時間をかけて参加者と対話を広げていければよかったと思いますが、その学びはこれからの対話に生かしていきたいと想います。

\*当日は、報告書を配布資料として100部持参したものの、不足が生じるほどの参加者でした。限られた紙面ですが、これはその報告です。

（鈴木眞廣●保育・子育て総合研究機構代表）

### 話題提供1 「共に生きる」ということ

私は、「共に生きる」人格の基礎を築くことが乳幼児期の基本的な課題だという提案をしました。

教育基本法第1条は「教育は、人格の完成を目指す」といっています。では、どのような人格なのでしょう

か？それに続いて「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」といっていますが、「平和」にせよ「民主主義」にせよ、基本となるのは「共に生きる」人としてのあり方でしょう。

「共に生きる」とは、周囲に、ある集団に、社会に、自分を合わせて生きていくことではありません。特定の集団の中だけで成り立っている「仲よし」は、ともするとその集団の外に対して排他的であり、本当の意味での「共に生きる」ではありません。そうではなくて、自分とはちがいを持つ他者を「人」として尊重し、その存在を否定しない心をベースに他者の側に立って考えることのできる柔らかさ、他者の置かれた状況を理解しようとする知性を持った一人の「人」として生きるということです。

子どもは乳児の時から既に、他者への素晴らしい共感能力、共生感覚を持っています。そのことをベースに「共に生きる」人としての育ちを考えてみました。

自主シンポではいくつか事例を紹介しましたが、「人の気持ちを感じとって自分なりに何とかしようとする心」が、乳児期から備わっていると思えてなりません。

やがて人は、他者の言動、振る舞いや反応に心動かされ、興味関心を抱き、相手の気持ちを読み込んでい

こうとし、心動かされたものを行動として表していこうとします。そのようにして生まれる共感が広がり深まっていくことを大事にしたいです。

幼児期に入ると、わかり合える特定の仲間との仲間意識が強まることはよく知られています。それは幼児期から学童期にかけての一つの特徴といえるのでしょうか、そのことをどう評価したらよいのでしょうか？私にはむしろ、簡単にはわかり合えない違いをもつ人と出会い、その人の気持ちをわかって、どうかかわったらよいのかを考えていく中で生まれてくる「共に生きる」意識を追求していくことが大事だと思えます。

「共に生きる人としての育ち」にとって必要な課題はこの先いっぱいあります。しかしベースとなるのは、「人の気持ちを感じとろうとする心」「人の状況を理解しようとする心」「人の身になって考える心」、そのような「柔らかに開かれた心」であると考えます。

(遠山洋一●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員)

## 話題提供2 「第7の扉」を「保育方法」として試行

本研究機構は報告書で6つの扉を提示し、第7の扉は“各園でどうぞ”と提言しました。提言を受けて、第1の扉「カラダで世界と出会う」の狭義の保育方法として（あえて）「サーキット」を10分という短時間の中で、静止画を用いて紹介し、取り組みポイント、さらに留意点まで言及しました。発題の動機は、日本の保育界（理念研究）に対する私自身のフラストレーションです。

国の「指針」があり、各園に「保育課程」があるにもかかわらず「グランドデザイン」が待望されるのはなぜだろう、この問いに潜入すると、今も多くの保育

者が欲する「保育方法」や「教材研究」が見えてきます。「子ども理解」は「教材研究」でもありますから、「デザイン」を具現する「方法の研究」も必要。なので、自法人で共通実践されている「サーキット（保育方法）」を語りました。この試みは、平凡な実践が理念の扉を開き、理念と実践が往来する一つの契機になるように画しましたが、当日、（予想通り）誤解を招いたように思われます。それ故、今後、実り多い議論が生まれる可能性を実感し、日本の保育界が活性化する「話題提供」になりえたと手応えを感じました。

(片山喜章●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会副委員長)

## 話題提供3 グランドデザイン「6つの扉」を手がかりに

『乳幼児教育の真』を、これからどのように考えていけばいいのだろうか？一つの試みとして、これまでの教育観から脱却し、新たな教育観で乳幼児教育を捉え直していくことが必要であると考えられる。本研究機構が提起した報告書の中では、『子どもが世界から、

自分なりの意味を引きだし、自分なりの意味を与えていく営み』と、新たな教育観を提案している。

そこで、本シンポジウムの中で、保育園での実践や日々子ども／子どもたちの具体的な姿から、この新たな教育観について考えていくことを通して、私たち

保育者がこれまでの実践を捉え直し、子ども／子どもたちから出発する新たな実践のあり方を検討していきたい」(日本保育学会第69回大会要旨集に記載)

このような観点から、1歳9か月の子どもの砂遊びの一場面を通して報告書で伝えたい、新たな教育観について考察を試みました。私の課題提起の中にもあるように、私たち大人が、知識を授ける従来の教育観ではなく「子どもが世界から、自分なりの意味を引きだし、自分なりの意味を与えていく営み」を新たな教育観として提案しています。ただ、ここで忘れてはならないことは、子ども／子どもたちのこの「営み」には、それを「演出し、介添えする営み」も含まれている、ということです。

では、どのように「演出し、介添えする」ことができるのでしょうか？私は、「こうすれば、こうなる」という明快な答えは、私たちが提案する新たな教育観の営みの中にはないと思っています。だからこそ、目の前にいる子ども／子どもたちに、丁寧に「聴き入る」ことから出発しなければならないのです。では、どのように「聴き入る」のか？そのための一つの手がかり



が、報告書で示している「6つの扉」と考えています。

「6つの扉」が意味するものを、まずは、日々の子ども／子どもたちの姿から見つけること、それとともに、どのように「演出し、介添え」していくのか、「6つの扉」から私たち大人が考えていくこと、こうした実践が積み重なっていくことによって、新たな教育観の「営み」が創造されるのではないのでしょうか。

(井出孝太郎●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員)

## 司会進行を 保育者も、カラダで世界と出会う 終えて

母親の重篤を宣告された70歳になる婦人は、不安と悲しみに涙しながら一人帰路につきました。自宅に戻り車のドアを開けた途端、あたり一面の地の底からわき上がるような蛙の大合唱が一人ぼっちの婦人を包み込みました。明るくてユーモラスで能天気なケロケロに思わず頬がゆるみ、大きな慰めと励ましをその婦人は感じます。他人にはやかましいだけの蛙の大合唱も、婦人にはいいしれぬ安堵感を与えてくれました。以来、婦人は蛙の歌を子守歌に安らかな眠りにつくのだと、ふと手にした夕刊(産経新聞2016年5月30日付)の読者投稿欄にありました。

おなじ蛙の大合唱も、聞き手によって騒音にも子守歌にも聞こえる、ケロケロの意味が違ってくる。これはどうしたことなのでしょう。

本研究機構発行の報告書にはグランドデザインへの6つの扉が示されており、その中に「カラダで世界と出会う」があります。なぜこの提案なのかというと、「子どもが世界から自分なりの意味を引きだし、自分

なりの意味を与えていく営み」が今、第二の教育観として求められているからだといいます。「蛙の声」と題したエッセイを書いた婦人も、思えばカラダで蛙の大合唱の世界と出会い、自分なりの意味を聞きとり、自分なりの意味を与えて、母親がくれた悲しみを乗り越えてゆこうとしています。婦人は、死と隣り合わせの母に向き合う状況に身を置くからこそ、蛙の声に安堵を覚えたのではないのでしょうか。蛙の声は、婦人の死生観をも覆すような「生命性にふれる体験」だったのでしょう。だとすれば、第二の教育観は、ほかの誰でもないこの婦人の中にあることになります。

私見ですが、保育のグランドデザインとは、保育者がカラダで保育の場に臨み、カラダで子どもと出会い、カラダで子どもを体験して(=子どもを感動して)、それまで自分が抱いてきた子ども観や保育観が揺さぶられた時、保育者によって描かれるものなのです。

ですから、誰かによって用意されたグランドデザインではだめなのです。先行研究や実践事例は、グラン



ドデザインを描かなければならない時にながしか役立つかもかもしれませんが、グランドデザインを描く作業は人任せにはできないのです。そう、グランドデザインは、保育者が自らのカラダで出会った体験に自らの

意味を見出す作業です。自主シンポの司会者であった私は、登壇者の提供する話題を聞きながら、考えていました。

(室田一樹●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員)

## 指定討論者 価値観の流動状況に対応するために として

保育が充実すればするほど、その充実の原因を検証することがおろそかになりがちです。加えて「その充実が、教育と呼べるものであったのか」という検証もおろそかになりがちです。しかし、日々の保育を立ち止まって検証することは必要です。特に「今日の保育は『思い』に沿ってできていたのか」という検証と、「その『思い』が、教育と呼べるものであったのか」という検証は必要です。そういった検証をするためには「教育」を定義しなくてはなりません、現代という時代は「教育」を定義することが非常に難しい時代です。

その根底には価値観の流動性がますます増しているという状況があります。電話やテレビといった機器を例にとります。100年前は一家に一台のテレビなど夢のような話でした。50年ほど前には、一家に一台のテレビが実現されつつありました。そして現在は、一家に一台どころではなく、一人に一台のテレビ。しかも、テレビと電話が一体となった、手のひらサイズのテレビです。テレビ一つがこれだけ変わるわけですから、それに応じて社会も変わっていきます。もちろん人間観や、教育観もますます変わっていきます。そのような状況においては、教育観の混乱状況が起こります。あれも「教育」、これも「教育」、それも「教育」といった具合に、何が本当の教育なのかわからないくらい、様々な教育観が登場します。もちろん、多様な教育観が存在する状況は、一つの教育観に縛られている状況よりは健全な状況なのですが、日々の保育を検証するための物差しがわかりづらい状況でもあります。

私は、「意味」というキーワードを用いて、教育を次のように整理しました。第一の教育は「先行世代が世界につけた意味を、後継世代としての子どもに注入する営み」です。第二の教育は「子どもが世界から、自分なりの意味を引きだし、意味を与えていくことを介添えする営み」です。

この両極の間に、各園が自身の保育を自覚的に位置

づけながら、独自の教育を実践し、そこから得た知見を語り合う。日々の保育を検証するための物差しは、そうした共同作業によって出来上がるものだと思います。そして、その物差しに沿って、社会全体が組み直される。その時、物差しは、保育のグランドデザインから、社会のグランドデザインとなるのです。

(久保健太●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員)

### 【追記】

この自主シンポの企画と併せて、子どもの育ちにかかわる多くの関係者に読んでいただきたいと、『保育通信』に掲載した、汐見稔幸氏の研究知と、本研究機構委員による実践知の対談「乳幼児期の教育を考える」を構成し直し、新たな章も書き加えて編集した『保育のグランドデザインを描く—これからの保育の創造にむけて』（汐見稔幸・久保健太・編著、ミネルヴァ書房、2016年5月）もまとめました。これからの保育を考える上で、示唆に富んだ大変内容の濃いものになりました。ぜひ読んでいただきたいと思います。

### 編集後記

#### ◎自身の「とらえ直し」

本研究機構が保育の「とらえ直し」を探求しているさなか、「指針」の改定作業が粛々とすすめられています。改定に際して、無作為にせめて200園くらい選んで「いかに活用したか」「活用されないのはなぜか」「どうあるべきか」等々、検証作業をするのが基本です。「指針」は、我々利用者、ユーザーのことをもっと考えて自身の「とらえ直し」を試みてはいかがでしょう。

(片山喜章●(社福)種の会理事長、神戸常盤大学客員教授)

#### ◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟  
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会  
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10  
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879  
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>  
E-mail [ans@zenshihoren.or.jp](mailto:ans@zenshihoren.or.jp)